

公益財団法人 日本骨髓バンク 第 69 回 業務執行会議 議事録

開催方法：コロナ禍の影響によりWEB会議形式で開催（今回の業務執行会議をWEB会議とすることにつき理事全員の同意を得ている。）

日 時：2020年（令和2年）7月10日（金）17:30～18:40

出席者：小寺 良尚（理事長）、加藤 俊一（副理事長）、佐藤 敏信（副理事長）、
浅野 史郎（理事）、大久保 英彦（理事）、金森 平和（理事）、鈴木 利治（理事）、
高梨 美乃子（理事）、高橋 聡（理事）、谷口 修一（理事）、橋本 明子（理事）、
小野 高史（監事）、相村 岳央（監事）

事務局：五月女 忠雄（事務局長）、渡邊 善久（総務部長）、小島 勝（広報渉外部長）、
小川 みどり（移植調整部長 兼 新規事業部長）、折原 勝己（ドナーコーディネータ部長）、
上原 淳（総務部）
順不同、敬称略

1) 開会

小寺理事長が冒頭に以下の趣旨で挨拶した。

当法人は来年創立30周年を迎える。30周年という大きな節目なので、イベントなど今から準備しなければならない。2021年10月2日（土曜）に霞が関のイイノホールを使って厚労省、日赤、歴代理事長、バンク功労者、協賛社幹部などを招き300人規模で開催する。プログラム案として記念式典、功労者らに対する表彰、記念シンポジウム、イベント、アトラクションを考えている。7月16日（木）に準備委員会を開催する。準備委で記念誌などの検討を進めていく。

2) 業務執行会議の成立の可否

業務執行会議運営規則第6条により本業務執行会議が成立した。

3) 議長選出

業務執行会議運営規則第5条により業務執行会議の議長は理事長があたるとされ、小寺理事長が議長に選出された。

4) 議事録署名人の選出

議事録を作成するための議事録署名人は、業務執行会議運営規則第8条により議長と出席した副理事長が記名押印する。小寺理事長と加藤副理事長、佐藤副理事長がこれに当たるとされた。

5) 議事録確認

前回（6月22日）の臨時理事会議事録案を全会一致で了承した。

〔議 事〕

6) 協議事項（敬称略）

(1) COへの夏季飲料代支給案

五月女事務局長が資料に基づき説明した。

加藤副理事長より「コロナ禍の状況下でコーディネーター（以下、COという）の活動報酬に何か上乘せできないか」というご意見を先月の理事会でいただいた。残念ながら本年度は（コロナ禍により）収支が厳しくなることが目に見えており、手当を増やすことはできない。一方でここ数年、非常に暑い夏が続いている。COには、活動の際に熱中症に気をつけるように常々連絡している。そこで面談等外出を伴う活動の際に1回あたり200円を飲料代として支給する案を提案する。昨年7～9月実績では支給対象に該当する活動が月1000件ほどだった。したがって1か月の負担額20万円、3か月で約60万円を要する。本日ご承認をいただけたら、報酬を規定している「COに関する内規」を改定して本年7月1日から遡及したい。

以上の説明の後、意見交換が行われ、全会一致で承認された。

(主な意見)

- <小寺> COは厳しい状況下で頑張ってくれている。財政事情を考えると十分な加算給付はできない。ささやかな金額だが「頑張ってください」という謝意を表したい。
- <加藤> (支給の仕組みを) 迅速に設定していただき事務局に感謝する。「危険手当」というべきか、それに類する報酬を何か出せないかと提案した。「夏季飲料代」と穏やかな名称であり、これは夏しか出せないということになる。どちらかというのと熱中症対策のように感じる。危険手当というニュアンスを持つ名称も良いかと思う。活動実績にもよると思うが一CO当たりどれくらいのか算額になるのか。
- <五月女> COの活動回数には幅があり、月1万円のCOもあれば10数万円のCOもある。外出を伴う1回の活動につき200円加算ということで、例えば月10回の面談等を実施したCOは2000円、3回活動したCOは600円が加算される。
- <加藤> (令和2年度の) 予算には入っていないので、とりあえず何らかの謝意を示すということで良いと思う。できればコロナ禍に限定せず恒常的に支援する形も議論していくべきと思う。
- <浅野> COには「コロナ禍で大変だから支給する」と示すのか。
- <五月女> あくまでも飲料代として支給する。
- <浅野> 「コロナ禍の中でのコーディネートご苦労様です」という趣旨だったと記憶している。飲料代という形でCOに謝意が伝わるか。
- <五月女> もともと夏の熱中症対策として検討していた。それをこのタイミングで一部実現させようということである。
- <浅野> 「コロナ禍で」というニュアンスは入らないのか。
- <折原> 熱中症対策に関して説明する。コロナ禍に伴って夏場でもマスク着用が義務付けられている。そのため適切に水分補給をすることを促すため200円加算という支給を考えた。
- <浅野> コロナ禍が来夏にもし収束したら、200円加算は無くなるのか。
- <折原> (収支面を含めて) 状況次第で判断する。COには(今回の議案が)承認された後で告知する。趣旨は伝わると考えている。
- <浅野> 「暑いけどマスクをしてください」というメッセージということか。
- <折原> その通りである。

<小寺> 浅野理事の意見は「コロナ対策という言葉はどこかに入れた方がいい」ということなので、しっかりと告知してほしい。

<大久保> 内規案に「夏季飲料代は7月から9月限定で支給する」と文言が入っている。内規が変わるまで続けるという理解でよいか。

<五月女> それほど大きくない金額なので来夏の状況を見て判断することになる。状況が許せば引き続き支給したい。

<大久保> 財政状況に応じてということか。

<五月女> その通りである。

7) 報告事項（敬称略）

(1) 全国大会ビデオメッセージ進捗状況

小島広報渉外部長が資料に基づき説明した。

9月に予定していた「全国大会 in 広島」中止に伴う代替企画として、著名人によるビデオメッセージをWEB公開する。視聴者へドナー登録を促したり、登録者へのリテンションといった副次的効果も見込める動画を公開していきたい。テーマは「ツナガル、イノチ。」、副題は「～ドナー登録でつながることができる希望があります～骨髄移植でつながることができる命があります～」ということで、順次出演依頼している。全体イメージとしては、元患者や提供ドナー、著名人がメッセージを伝えるリレー動画を考えている。「ありがとう」や「希望」を伝えつつ「骨髄移植でつながる命」を感じさせるような熱いメッセージが伝わる動画を制作したい。出演者には20～30秒で想いを語ってもらう。統一感を出すためにブルーナのイラストを持ってもらってメッセージをつなぐ案を考えている。所要時間は5分程度、1人20～30秒で10人ほどにご協力いただく。9月19日の「世界骨髄バンクドナーデー」に合わせて当法人のYouTubeチャンネルで公開したい。出演候補として10名をリストアップした。「ルート有」と記載されている方は、過去に当法人広報に協力いただいた実績がある、または交渉ルート（連絡先）がある方である。これ以外にも大リーグ元レッドソックス所属の上原選手や巨人軍の菅野選手にも依頼したい。ビデオメッセージ作成に関しては、大久保理事と共に準備委員会で進めている。来週7月16日にも準備委を開催する。

(主な意見)

<加藤> 名称から「in 広島」（開催予定地）は消したのか。

<小島> ビデオメッセージに関しては「広島色」をほぼ無くす形で進めたい。メッセージに併せてWEB版全国大会（専用ページ）も作成する予定である。WEB版全国大会に理事長挨拶などを掲載する予定で、そこに広島色が出せればと思う。

<加藤> テーマが「ツナガル、イノチ」となっている。世代の問題かもしれないがカタカナは固い印象を受けるので、平仮名の方が柔らかいのでは。

<小島> 敢えてカタカナにした。カタカナの持っている若者感というか（漠然としたことであるが）平仮名、カタカナ、漢字を含めて広報渉外部で検討した。カタカナが一番「今風」感があり、若者に浸透させるためにもカタカナにしたい。

<加藤> （若い人にアピールするために）ユースアンバサダーの意見も聞いて決めたら良い。

- <小寺> 平仮名も日本古来の字であり悪くはないと思う。
- <浅野> 出演者候補の中で、池江璃花子さんは骨髄移植を受けたのか。
- <小島> (報道を通じて)「2019年9月頃に移植を受けた」とだけ聞いている。
- <浅野> 笠井アナは候補としてどうだろうか。笠井氏は退院して元気ときく。悪性リンパ腫で骨髄移植を受ける可能性はあるが、今回のビデオメッセージはあくまでも骨髄バンクの縁のある著名人ということだ。化学療法で治った人はやや違和感がある。
- <小島> 臍帯血移植を受けた候補者や、移植や提供もしていなくてドナー登録しているだけの候補者もいる。骨髄バンクやドナー登録の必要性を影響力のある有名人が訴えることで、ドナー登録者数アップや当法人のPRにつながればよいと考えている。広報渉外部が実施してきた講演会では、臍帯血移植を受けた方に「本当は骨髄バンクを介して移植を受けたかった」というこぼれ話をしてもらったこともある。
- <浅野> 臍帯血は(骨髄バンクと)縁がないわけではないので分かるが、移植を受けていない方はそぐわないのではないか。
- <小島> 皆様のご意見を参考に改めて検討する。
- <浅野> 山中伸弥先生は良いと思う。笠井氏はミスリーディングになる気がする。
- <橋本> 笠井氏に関して浅野理事と同意見である。血液の病気にかかった著名人という理由で候補にしたということだと思うが、違和感が若干残る。池江さんは「造血幹細胞移植を受けた」という話を聞いたことがある。これをそのまま(非血縁者間の)骨髄バンクにつなげるのは無理があると感じる。
- <小寺> (今秋の広島開催が中止になった件は)前回の会議でも議論した。全国大会を広島で改めて開催するというので、30周年(2021年)の前なのか後なのか、非常に大事な点だ。地元関係者のモチベーションを大切にするのは当法人の広報の根幹である。丁寧に扱って検討してほしい。
- <橋本> 全国大会がWEB版になった点は大きな変化だ。運営方法が変わって現地の関係者を活かすことが難しくなるかもしれないが、もし活かされたなら非常に稀有なイメージの全国大会になると思う。(コロナ禍の状況によるが)WEB版全国大会が今後ずっと続くとも思えない。来年は東京で30周年記念大会があり、今年はWEB版と絡めて開催できたというのが広島の人たちにとっても良い経験になるかもしれない。

(2) ACジャパンの新CM

小島広報渉外部長が口頭で説明した。

ACジャパンの支援キャンペーンが1年間の休止期間を経て復活した。7月1日から新キャンペーンが始まり、プロサッカー選手でアルビレックス新潟所属の早川史哉(はやかわ ふみや)選手が出演している。彼は移植経験者であり、それが広告のテーマである。本日はテレビCMをご覧いただきたい。

【CM(30秒版と15秒版)を上映】

(3) LINE公式アカウントサービス開始報告

小島広報渉外部長が口頭で説明した。

既存ドナーのリテンションや新たなドナー獲得のため、LINE公式アカウントを7月1日に開設した。7月1日には厚労省の記者クラブでブリーフィング(説明付き資料配布)を実施した。LINE社広報担当と共に説明した。日本テレビや時事通信などで報道され、

今日までに約 1450 人の登録があった。自治体からも問い合わせがあった。全国で復活しつつある登録会現場でも、ドナー登録者や関心を持っていただいた方に登録を勧めている。QRコードをかざすだけで簡単に登録できるので、理事の皆様にもぜひ登録していただきたい。（リテンション以外にも）全国の説明員への案内文書をLINE経由でやり取りできる機能もあり、業務効率化や郵送費削減を期待している。

(主な意見)

<大久保> 登録して内容を拝見した。非常に分かりやすくて良いと思う。今後は若者にPRできる仕掛けをお願いしたい。登録会の現場でも登録を促すという話だが、それ以外のイベント会場でも広くPRしてほしい。

<橋本> 海外からも登録できるのか。

<小島> (英文は無いが) 可能である。

<橋本> 既に欧米のどこかの国から登録があったという例は無いか。

<小島> まだ無いが、そうした海外からの登録があればお伝えする。

<橋本> 知り合いの海外の方にも登録を勧めたい。

<谷口> LINEの中国版が世界規模で動いている。LINE自体は日本周辺だけで浸透しており、普及している国は少ない気がする。世界中で見てもらうなら中国語版が良いかもしれないが、そこまでする必要はないと思う。

(4) 骨髄バンクチャリティーについて

小島広報渉外部長が口頭で説明した。

劇団絵生(えき)による舞台「友情～コスモスのバラード～」が長年に渡り上演されている。(これまでに相当の寄付をいただいている)同劇団の中崎社長からタイアップの依頼があった。花柄をデザインした「ポーセラーツ」という陶器に「骨髄バンクチャリティー」という文言を入れるものである。これを舞台公演会場や(来年公開を予定している)アニメ版「友情」公開記念のイベントで販売して、売上げの一部を当法人に寄付するという仕組みである。鈴木理事にも事前に相談させていただいた。今までも卓上カレンダーで同様のタイアップ事例がある。今回も正式に覚書を交わした上で話を進めたい。

(5) マンスリーJMDP電子化報告

小島広報渉外部長が口頭で説明した。

紙媒体の「マンスリーJMDP」を2020年7月号から電子化した。今までは骨髄バンク全体動向を伝える一般向け頁と、コーディネートに特化した内容の頁を一つの紙媒体にして郵送していた。これを分離して、一般向け頁を電子媒体として独立して公開する。コロナ禍を契機にWEB公開(当法人HP)が始まったが、紙よりも電子媒体の方が読者に便利であり読みやすい。また内容を分離することで必要な情報を必要な方に的確に伝えられる。

(6) データ利用申請

小川移植調整部長兼新規事業部長が口頭で説明した。

データ利用申請が3件あった。2件は大阪市立大学の日野先生からのPBに関する申請である。1件目を説明する。PBはコーディネート期間を短縮できて、かつドナーの負担も軽減できるというメリットがある。その利点にも関わらず利用率は10%である。PBを普及させるために資料やマニュアル整備が必要であり、そのための実態調査をしたいという申請である。データは既に提供されていて、2020年7月5日の班会議で発表された。

2件目も同じく日野先生からのPBに関する申請である。G-C-S-F投与前の血液データを集め、G投与とPB採取の安全性を確認して普及につなげたいというものである。2021年1月の班会議で発表される。

3件目は広島大学の戸先生からの申請である。2020年3月からNGS-SBT法という最も精度の高い検査方法をHLA検査に導入した。その後の実施状況に関して件数などを検証したいということでデータを提供した。これも7月の班会議で発表された。

(主な意見)

<小寺> バンクの今後の発展に非常に大事な研究だと思う。申請3件を承認いただきたい。

(7) コロナ凍結移植後状況

小寺理事長が冒頭に補足説明した。

コロナ禍によってコーディネートの確認検査から移植に至るまで色々な場面で障害が多い。それを解決する一つの手段として、凍結保存が国際的にも奨励されている。ドナーが少なくともコロナウイルスに感染していない点を確認してから、前処置に入りたいという移植施設がある。この期間に造血幹細胞の凍結保存を認めるということで進めてきた。骨髄・末梢血共にたくさんあった。初期の凍結例に関する生着の有無という我々が一番懸念にしていること、それが実際に使われたかどうかということ、それに関するデータが出た。初期段階の中間的データではあるが小川部長から説明する。

続いて小川移植調整部長兼新規事業部長が口頭で説明した。

現在60件の凍結希望が出されている。60件の中で移植が終わった例と終わっていない例がある。生着確認を移植後約1か月の時点で各施設に聞いており、19件中の18件が生着確認できたと回答している。

(主な意見)

<小寺> 初期段階のデータだが、懸念していた「使われないのではないか、生着しているのだろうか」という点に関しては明るいデータだと思う。今後、凍結が何件増えるか分からないが、コロナ禍における緊急凍結保存ということで医療委メンバーを中心に、できれば論文にしたい。

<加藤> 現況からこの状態はかなり長期間続くと考えられる。8月まで延期というのがさらに長期化すると思うので、恒常的な導入も含め医療委員会で検討してほしい。

<小寺> とても良い意見で、私もそちらにかなり傾いている。もちろん慎重に検討したい。最終的に凍結を常態技術の一つとする上で、どこで承認を得たら良いかも十分に考えてやっていきたい。

<小川> 凍結審査は、全件を小寺理事長にお願いしている。

(6) 調整医師の新規申請・承認の報告

折原ドナーコーディネーター部長が説明した。

令和2年2月8日から7月7日に新たに申請・承認された調整医師の人数は39名、合計で1134名である。

(7) 寄付金報告

小島広報渉外部長が説明した。

6月の寄付は件数622件、金額は597万1662円。昨年6月は寄付額が突出して多い。これは個人から金貨による多額の寄付があったからである。件数をみると、過去4年で一番多く大変ありがたく感じている。患者家族から多額の寄付をいただいた。「20年以上前に息子が移植を受けた」という父親から感謝の手紙付き寄付もあった。

(8) 移植件数報告

渡邊総務部長が資料に基づき説明した。

2020年6月の移植件数は81件、4月から6月の累計は244件。昨年同期が312件であり、比較するとマイナス68件である。

(主な意見)

<小寺> (コロナ禍による移植件数減という) 大変な逆風下だがバンクを介した成人ドナーからの移植がそれなりに実施されている。これを旧に復する努力を今後続けたい。

高梨理事は厚労省研究班で非血縁者間移植の比率を出されたと思う。2020年2~5月の結果を口頭報告していただけるか。

<高梨> 非血縁者間移植のうち臍帯血移植が52%ほどで長く推移していたと思う。直近の5月はそれが35%と65%ほどの比率になった。(コロナ禍で) コーディネートを進めるのに苦労が多いと思う。

<小寺> 2020年4月もだいたいそのくらいか。

<高梨> 4月は微増であり大きく動かなかった。臍帯血移植が増えたのは5月の連休直後からである。4月はコロナ禍対応で皆が忙しかったと思う。

<谷口> コロナ禍との直接的な関係は分からないが(虎の門病院では) 外来も入院も血液疾患患者がかなり減っている。自分の新患外来も5月までいっぱい入っていたが、6月に入ると急になくなって、入院患者も6月に入り血液患者が2割くらい減っている。今、移植している患者は以前に準備しており、その数はあまり減っていない。患者を紹介してくださる開業医の先生方と話しても、そちらの患者も皆ステイホームしている。各病院、我々も含めとても苦労している。「コロナ患者がいるから行きたくない」というより「外に出たくない」という患者がかなり多いようである。

<小寺> 血液患者は特に敏感なのか。

<谷口> 再来患者はとても敏感である。

- <小寺> 慢性患者で薬をたくさん出せるようなところで患者が少ないというのは「それなりに慎重にやっている」で済む話だ。しかし血液患者ではそうした人は割合少ない。「本当は通院してくれないと困る患者」が多いと思う。
- <谷口> 再来の患者は電話で処方できる。電話で患者の健康状態をチェックするが、月1度のデータが必要な患者には、その旨を伝え来院してもらおう。再来患者はそれほど減っていないと思う。新患は少々症状があっても、家にいるのではないか。今年3~4月から健診がストップしている。その結果、早めに血液検査でひっかかる人が激減していると思う。
- <小寺> 非常に参考になった。バンクにも間接的に関係してくる。
- <谷口> 今日の外来は新患の患者も来られるようになった。発症率が減るわけがないので当然戻って来るとは思う。
- <加藤> ドナーにPCR検査を実施していると思うが、保険の面で問題ないか。
- <谷口> 感染が疑われる場合は問題ないと思う。
- <加藤> 5月の局長通達ですべて解決だと思う。(臓器移植はさらに移植医療対策推進室からの通達だと思うが) ドナー及びレシピエントともに1か月に1度のPCR検査を認めるとされている。(事務局へのお願いになるが) 対策室に相談して造血幹細胞も横並びで同じように通達を出した方が皆が安心して検査できると思う。
- <小寺> 造血幹細胞ドナーに関して、WMDAから「各国がどんな具合に対応しているのか」を調査した最新データが事務局にある。まだ正式公開ではないので、手許資料として欲しい方は事務局に申し出て欲しい。加藤副理事長の提案も確かに大事である。臓器移植と造血幹細胞移植ではドナーの数が桁違いに違う。これは対策室とも一度相談してみる。まずはコロナ感染ドナーがどのような影響を受けるのか慎重に検討した上で対応したい。
- <高橋> ドナー保険審査に関しては問題ないと感じる。コロナ禍はしばらく続く。採取ドナーはPCR検査で全員確認した方が良いと思う。採取医療スタッフは移植スタッフと重なるので、院内感染だけではなくて医療スタッフ間感染が医療システムに大きな影響を及ぼす。そこは確実な対策をとった方が良い。世界的な流れというより、日本がイニシアティブをとるくらいの気持ちで進めるべきだ。
- <小寺> 海外でもドナーの安全という視点と同時に、医療スタッフや病院を守る上でも(PCR検査が)必要という流れになりつつある。
- <鈴木> こうした逆境でも月80件ほどの移植が実現できている点に敬意を表する。
- <小寺> 先日の班会議で高梨理事が報告されたグラフをWEB会議画面上に示した。棒グラフ全体が非血縁者間移植で、青がバンクドナー、オレンジが臍帯血である。
- <高梨> 今年になって臍帯血の割合がやや上がっていた。5月の上昇は今までにないものだった。月200件ほどの移植がコンスタントに行われていたということだと思う。

以上